



5th OPEN FORUM “Y”

「忘れません：震災被災者・難民・子どもの貧困」

報告書

日時：2016年6月18日（土）

09:30～19:50

場所：オリンピック記念青少年センター

主催：ワイズメン国際協会東日本区

目次

● 目次	1
● ごあいさつ	2
● 「オープン・フォーラムY」が目指すもの・今回のテーマ	3
● プログラムを振り返る	4
● 講師・ファシリテーター紹介	6
● プログラム内容とタイムライン	7
● 1日の流れ プログラム点描	8
● 全体写真と参加者一覧	10
● アンケート集計と参加者コメント	11
● 参加ワイズのコメント	13
● 会計報告	15
● 資料 ワークブックに掲載された講師・ファシリテーターの原稿	16

本報告書の写真は一部を除いて鈴木洋一氏のご好意で掲載させてもらっています。感謝して報告致します。

ご挨拶

第5回オープン・フォーラムY

実行委員長 浅羽俊一郎

(2016-17 ユース事業主任)

ここに第5回オープン・フォーラムYのご報告をお届けいたします。本プログラムを支えて下さったワイズメン、YMCAの皆様、大学関係者、ユースの皆様のご協力に感謝申し上げます。

今回のオープン・フォーラムY (OFY) は6月18日(土)にオリンピック記念青少年センターで開催しました。「忘れません：震災被災者・難民・子どもの貧困」をテーマに「現場」を考えるプログラムを企画しました。今の若者がインターネット情報だけで現場を判断してもらいたくないということで、特に人道支援と児童養護の現場で働いてこられた木山啓子氏、高瀬一使徒氏、福井美穂氏の3氏、また全体プログラムのファシリテーションを引受けて下さったご自身もまだユース世代の鈴木洋一氏に改めてお礼申し上げます。

当日はユース12名、ワイズメン10名(部分参加2名)、YMCA職員1名(部分参加)そして講師・ファシリテーターが朝9:30から夕方7:50までという丸1日のプログラムをこなすことになりましたが、最初のアイスブレイクと講師による本音の語りで話し合いムードが出来、後はグループ協議・昼食・休憩、そして最後の懇親会まで皆飽きることなく話し合いました。「もっと話し合いを続けたかった」とある学生が言っていましたが、ユース8名は2次会にも参加しました。ワイズメンもユースと同じ参加者として加わってもらえました。私はユースの話を聞いていて、彼らがそれぞれの現場と誠実に向き合っていることを知り、特に講師の皆さんと話し込んでいる彼らの姿にはとても共感を覚えました。私自身ユースと接したことで自分が少し変わったと思いました。久しぶりに大変充実した一日でした。(写真参照*)

OFYはオープンでありYMCA外のユースも参加出来ます。YMCAを知るきっかけになれば幸いです。その意味で今回の参加ユースの中から2名が日本YMCA同盟の「地球市民育成プログラム」に参加することになったことは喜ばしいです。今後とも皆様がOFYを温かくご支援下さいますようお願い致します。

最後に今回のOFYの準備に携わり、当日も参加して下さった実行委員、ユース委員・主査の皆様にお礼申し上げます。

太田勝人氏(東京世田谷)、小原史奈子氏(東京たんぽぽ)、衣笠輝夫氏(埼玉)、高彰希氏(立教大学Y)、小口多津子氏(東京八王子)、張替滋夫氏(東京世田谷)、本間剛氏(東京江東)、松香光夫氏(東京コスモス)、渡辺大輔氏(東京武蔵野多摩) (五十音順)

以上

オープン・フォーラムYの目指すもの・今回のテーマ

オープンフォーラムYは地域の課題、グローバルな課題について、学びたい、行動をおこしたいというユースが出逢い、ともに視野を広げ、プラン作りに挑戦するためのワークショップです。若者が参加しやすいように参加費を抑え、経費の大部分は東日本区ユース活動資金（YIA資金）を活用しています。ユースは公募で集めます。（会計報告は報告書 ページ。）

5回目となる今回のワークショップはテーマにも示しましたが被災者、難民、子どもの貧困など「人道支援」を「現場」という視点から考えたいと企画しました。現場とは事態がまさに進行している場所ですが、それだけでなくそこにいる支援者自身が現場の構成員です。現場では無関心で入られず、人は変えられ、変えられた人が現場を変えるところです。参加ユースが現場の重みを講師たちとの話し合いの中から感じ取ってもらうことを意図しました。また参加ユースのフィードバックを次回に活かすだけでなく、彼らの中から企画に加わるユースを募りたいと思っています。



プログラムを振り返る

実行委員長 浅羽俊一郎

第5回 OFY の準備を以下分野別に記します。

1) プログラム立案・準備

- 2015年12月から2016年1月にかけて OFY 準備にあたって関係方面にユースに関する意見を求める（Y 同盟、開発教育協会他）。その際、昨年オックスファム・ジャパンの鈴木洋一氏にもプログラムの内容について相談。この過程で難民、災害被災者、子どもの貧困の「現場」をテーマにすることが決まり、一方開催日は6月18日（土）、会場は昨年同様オリンピック記念青少年センターになる。
- プログラム案作成、講師候補との交渉を一任された浅羽は2月から3月にかけて鈴木氏にプログラム原案作成を依頼。また、ユース委の意向に沿って実行委員会にユースを加えるということで高彰希氏（立教大学 YMCA）に入ってもらい、3月22日の OFY 第1回実行委員会には鈴木氏と山根一毅氏（日本 Y 同盟）に同席してもらい、意見交換。ここでの話し合いを受けてプログラム企画、ファシリテーターを鈴木氏に依頼する方向に進むが、ワイズの YIA にそった事業としての性格を維持することと確認。

2) 講師陣の選定・交渉

- 実行委で最終的に決めたテーマ「忘れません：震災被災者・難民・子どもの貧困」に従って浅羽が知人の人道支援団体や児童養護施設と交渉を始めるが、いくつかの難民支援団体は6月中旬は「世界難民デー」関連のイベントが重なっていると断られるが、4月中旬までには木山啓子氏（JEN 代表理事）、高瀬一使徒氏（児童養護施設「さんあい」施設長）、福井美穂氏（難民を助ける会職員・大学講師）と現場経験者をお願いすることが出来た。5月には実行委有志と木山氏、福井氏を事務所に訪ね、ワイズの紹介、ユース委の意向について説明する。高瀬氏訪問は出来なかったが、以後講師3名と鈴木氏とはメールで打ち合わせ。後日ワークブックを製作することになり、4氏に掲載原稿の件でも協力してもらえた。

3) 広報・募集

ユース委では毎回参加者募集で苦勞する。今回も下記の方法を試みたが結果としては応募者14名、参加者12名（2名当日キャンセル）

- チラシ1,000枚作成。配布先は近隣の YMCA。特に東京 YMCA は各センターに配布。また、同盟の協力を得て学 Y メンバーに配布。また知り合いの先生方を通して大学生に配布依頼。
- 新聞社（朝日、毎日、東京）にもファックスで新聞への掲載を依頼。
- 昨年同様「国連フォーラム」を通じてメールで登録者（推定5千人）に配信。
- ワイズはドットコム及び、ユース委員、実行委員が口頭でアピール。
- 6月23日から27日にかけて関係者にお礼の手紙を発送する。

4) 最後に：実行委員長総括

事前に過去の参加者や他のユースから類似のワークショップについて意見を聴いて（1）ユースが受け身、（2）上からの目線、（3）短時間に一方的な講義、（4）参加者同士話し合いがない、（5）講師との交流が少ない、（6）参加費が高いなどのコメントがありましたので、これらの点については当初から配慮するようにしました。内容に関して今回は私の希望を早い時点でかなり取り入れてもらえたことにも感謝しています。むしろ私の方でもっと早めに取りかかるべきだった、というのが大きな反省点です。

一方、プログラムが参加ユースにどのような影響を与えたかという点については時期尚早だと思いますが、その後数名のユースからは現場の話しが聞けたと好意的なフィードバックを得ました。（巻末資料アンケート結果参照）今後彼らとは何らかの方法で絆を維持したいです。

今回の OFY もユース委員、実行委員の皆さんは忙しい中、事前の話し合いから当日の開催まで助け合いました。ワイズメン一人ひとりの責任感とチームプレー、ユースへの関心があって実現しました。副産物として所属クラブや部を超えたメンの繋がり・支え合いを経験できたことは大きな収穫でした。

以上

講師・ファシリテーターの紹介

講師名	略歴
<p>木山啓子氏 特定非営利活動法人ジェン (JEN) 代表理事</p> 	<p>1992年 米国SUNYバッファロー校社会学大学院修士。民間企業勤務後、1994年 ジェン創設に参加、旧ユーゴ地域代表、事務局長等を歴任後2016年4月より現職。緊急支援がうむ依存に着目、緊急事態からの自立支援を提唱。アフガニスタン、パキスタン、イラク、ヨルダン、スリランカなど24の国と地域で活動。日経ウーマン誌ウーマン・オブ・ザ・イヤー2006大賞 著書：『誰かのためなら人はがんばれる-国際自立支援の現場でみつけた生き方-』（かんき出版）</p>
<p>高瀬一使徒氏 社会福祉法人 三愛学園 児童養護施設「さんあい」 園長（施設長）</p> 	<p>社会福祉士 大学を卒業後、オーストラリアへ語学留学。その後青年海外協力隊員としてモロッコへ派遣。帰国後 1989年に国際NGOワールド・ビジョン・ジャパンに入団、緊急援助部長や海外事業部長等を歴任後 2014年3月に退団。同年4月より被虐待児や貧困家庭の児童を児童相談所の委託により養育する児童養護施設さんあい入職。現在園長として養育の質と職場環境の向上に取り組んでいる。埼玉県伊奈町に在住し、妻と共に1男3女の子育てに奮闘中。</p>
<p>福井美穂氏 認定NPO 法人 AAR Japan [難民を助ける会] 調査研究担当</p> 	<p>1998年英大学院修士課程修了、99年～07年旧ユーゴ、アフガニスタン、シエラレオネ、南スーダン、東日本大震災等でNGO職員として緊急人道支援に携わる。2007年から2年間、内閣府国際平和協力本部事務局研究員、2013年より2年間、お茶の水女子大学特任講師。現在は、AAR Japanで政策提言の基礎調査、及び青山学院大学大学院、東洋英和女学院大学・大学院、埼玉大学で非常勤講師。東京大学大学院「人間の安全保障」プログラム博士後期課程履修中。</p>
<p>鈴木洋一氏 ファシリテーター Wake Up Japan 共同代表 PowerShift Japan 共同創設者 オックスファム・ジャパン 啓発・青少年育成担当</p> 	<p>大学在学中より日本模擬国連など複数の学生団体にかかわる。2008年の北海道洞爺湖G8サミットへの若者の政策提言に参加、アフリカ開発会議では啓発活動を横浜市と共に行う。卒業後、マレーシアにて若者に対する環境啓発活動に参加。2009年8月より国際NGOオックスファムに啓発・青少年育成担当として参加。2014年に気候変動に対する若者の啓発イベント PowerShift Japan の立上げに参加。2016年2月より Wake Up Japan を設立、活動を開始。</p>

プログラム内容

OFY は当初からその企画の中にユースを加えようということが方針としてあり、今までは過去の参加者に実行委員になってもらっていましたが、今回はそれが叶いませんでしたが、前記のとおり、学生 YMCA の高 彰希氏が加わり、さらに外部からウェイクアップ・ジャパンの鈴木洋一氏が具体的なプログラム企画を進めてくれました。というのも 3 月 22 日の実行委員会で鈴木氏は自らのミッション、日本のユース啓発に向けた研鑽と大学や NGO などでの実践の話しを伺い、ご自身まだユースであることも考慮して思い切って彼のやり方を受け入れてみよう、ということになったからです。そういう意味で今回のプログラム（以下に表示）は鈴木氏のアイデアをユース委・実行委が受け入れる形になりました。また今回はユース用にワークブックを作成しましたが、その過程で関係者が原稿をシェアし OFY の趣旨、それぞれの問題意識などを事前に再確認できました。

以下に 1 日のプログラムの当初の企画です。プログラム項目の開始と終了は進行に合わせて調整され、実際の終了時間は 19:50 でした。（プログラム点描参照）

0800	実行委員集合・準備	*ワイズメンと鈴木氏 参宮橋集合。会場準備、チラシ貼りなど。 講師陣到着。ファシリテーターと打ち合わせ。
0930	開場・受付開始	*ワイズメン、受付に待機。
1000	オープニング・セッション	*開会の挨拶 浅羽実行委員長から参加者への歓迎の言葉。 ファシリテーターからオリエンテーション・約束の確認。
1020	アイスブレイキング 1	自己紹介
1050	Why are you here?	*講師 3 名が順に仕事に就いた動機を説明。
1130	質疑応答	
1150	グループ・アクティビティ	振り返り・なぜ OFY に参加したか話しましょう。
1230	昼食	センター棟カフェテリア ふじ
1335	アイスブレイキング 2	
1400	イシュー・ブリーフィング	各講師 30 分（課題と活動紹介・印象に残った点の共有）
1530	リフレクション	これまでの気づきを振り返ります。
1545	休憩	
1600	X ボックス トーク	さらに講師とファシリテーターとのやりとり。
1640	社会を動かすために（鈴木）	社会の変え方と日本社会について。
1710	グループ・アクティビティ	(1) これから何かを始めたい人 と (2) 課題解決のために周囲の友人たちに働きかけたい人 にわかれて話し合う。
1800	まとめセッション	以下の 2 点について、それぞれポスターを巡り記入します。 ● 社会問題の解決に向けて何を始めるか ・OFY で印象に残った言葉・アンケート記入 集合写真
1830	閉会式と懇親会	閉会挨拶 張替委員
1930	懇親会終了	後片付け・解散・希望者は 2 次会へ移動

一日の流れ：プログラム点描



午前 10 時開会式

- 参加者はまだ他人同士。実行委員長から挨拶。ファシリテーターの鈴木氏から約束事の確認。
ユース参加者 12 名（当日キャンセル 2 名）
講師 3 名、ファシリテーター 1 名
東京 YMCA 職員 1 名（部分参加）
ワイズメン参加者 10 名（部分参加を含む）



第 1 回アイスブレイク

- 早く議論しあえるように環境づくり。まずは知らない者同士が声かけあって出身地を確認し、日本列島の形に擬して並ぶ。静岡ってどの辺り？なぜ千葉がここにいるの？ グループは直に打ち解けた。



講師紹介「あなたはなぜ今ここに？」

- 各講師が自己紹介すると、ファシリテーターが続いて突っ込んだ質問。講師の皆さんも打ち解け、一挙に講師と参加者の距離が縮まった。



グループ・アクティビティー（1）

- グループに分かれて、なぜ OFY に参加したか話しましょう。ファシリテーターから参加者に「日本社会を変革できると思うか」との問いに、各自ポストイットに書いた答えを模造紙に貼った。ほとんどのユースが「変革出来る」と答えていた。



昼過ぎ オリセンのカフェテリアで昼食。

- 前売りの食券を受け取った参加者一同カフェテリアに移動。ユース、講師、ワイズと一緒に昼食。話題はつきない。講師も休む間もなくユースと話し込む。



午後のセッション アイสบレイク（２）

- 気分転換に身体を動かす。ファシリテーターがある単語を与えると、各グループのメンバーは無言のまま1-2分でそれに相応しい場面を想像してポーズを決める。決まったところで一人ひとり何のポーズか披露する。勘違いもあれば不思議と決まるグループもあり、部屋が笑いに包まれた。



イシュー・ブリーフィングとXボックス

- 3 講師がそれぞれの団体のミッションと現場で体験する課題を披露。きれい事では済まされない現実。政治問題、NPO を取り巻く日本社会、人道支援と現地事情等々。（ワークブック参照）
- ファシリテーターの鈴木氏は「社会を動かすために」で海外の若者の社会参加の事例と体験をもとにヒントを提供。



午後5時過ぎ グループアクティビティ（２）

- 参加者は2つのグループに分かれる。1グループは「何か社会に関わることをこれから始めてみたい人」のグループ、2グループは「課題解決のために周囲に働きかけたい人」それぞれ熱心に話し合う。参加者も講師も様々な角度から疑問を呈し、体験を共有し、議論を深めていた。



午後6時過ぎ 振り返りとシェアの時間

- グループで話合った後は他のメンバーたちにその内容を説明。そろそろプログラムも終盤だが、ユースは全然疲れていない様子。これからの課題を各自がポストイットに記入し、模造紙で公開。

* なお、この後記念集合写真を撮り、同会場で茶菓による1時間半の懇親会を持ち、参加者全員で後片付け・机を並べて解散した。また、ユース 12 名のうち8名がワイズとの二次会に参加。



ユース参加者一覧

五十音順

	氏名	所属		氏名	所属
1	浅見直輝	早稲田大学	7	里見洸祐	立教大学
2	芦原彩希	大妻女子大学	8	中尾はるか	
3	高 彰希	立教大学 (実行委員)	9	永坂 仁	獨協大学
4	小松恵美	浦和専門学院	10	中田美沙希	上智大学
5	佐藤主尉	獨協大学	11	藤永嵩秋	中央大学 卒
6	佐藤芽衣	大妻女子大学	12	村井時生	獨協大学

一般参加者 (ワイズメン・YMCA)

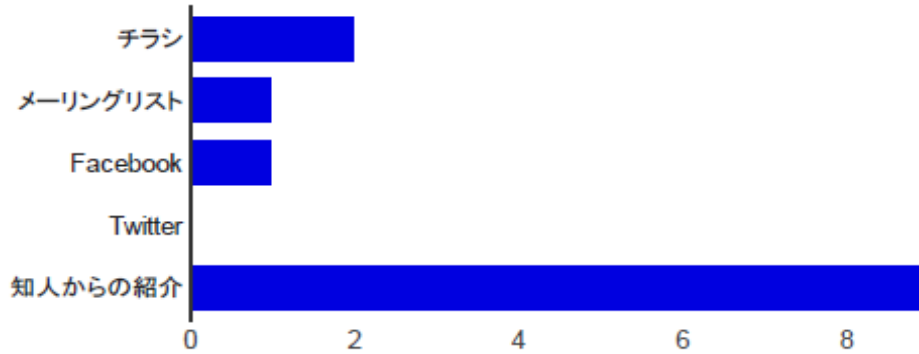
五十音順

	氏名	所属		氏名	所属
1	浅羽俊一郎	東京山手クラブ	7	張替滋夫	東京世田谷クラブ
2	太田勝人	東京世田谷クラブ	8	日野絵里子	東京 YMCA
3	小原史奈子	東京たんぽぽクラブ	9	本間 剛	東京江東クラブ
4	小原武夫	東京世田谷クラブ	10	山本 和	東京クラブ
5	衣笠輝夫	埼玉クラブ	11	渡辺大輔	東京武蔵野多摩クラブ
6	小口多津子	東京八王子クラブ			

参加ユースアンケート結果

1. 統計編 12名の参加ユースが全員アンケートに回答してくれました。

1) OFY を何で知りましたか? (重複記述可)



チラシ	2	18.2%
メーリングリスト	1	9.1%
Facebook	1	9.1%
Twitter	0	0%
知人からの紹介	9	81.8%

運営面について教えてください。特にコメントがある場合はその他に記載してください

2)-(ア) 日程



よい	11	100%
その他	0	0%

2)-(イ) 時間帯



よい	11	100%
その他	0	0%

2)-(ウ) 参加費



よい	11	100%
その他	0	0%

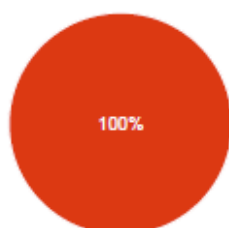
2)-(エ) 会場等



よい	11	100%
その他	0	0%

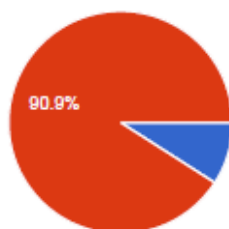
3) プログラムについて教えてください。

3)-(ア) ゲストの講演時間



短い	0	0%
ちょうどよい	11	100%
長い	0	0%
その他	0	0%

3)-(イ) ゲストの講演内容



簡単	1	9.1%
適度	10	90.9%
難解	0	0%
その他	0	0%

3)-(ウ) ファシリテーション



よい	11	100%
その他	0	0%

3)-(エ) 運営陣の議論への参加



よい	11	100%
その他	0	0%

3)-(オ) イベントの雰囲気



よい	11	100%
その他	0	0%

2. コメント編

以下、アンケートに記述で回答したコメントを無記名で列挙させていただきます。

質問4) プログラムでよかったセッションを教えてください。その理由はなぜですか？

- 木山さん、福井さん、高瀬さんの3人に対し、鈴木さんがコーディネートしたプログラムが良かったです。
- 講師の話
- グループアクティビティ
- 午前中の講師のお話
- まきこみについて話せた！
- 各講師の実体験。
- 社会を動かすために+グループアクティビティ。難民や子どもの貧困の現状や取り組みを聴いた後、現状を変えていくための動きや、同じ参加者の意見を伺えたため。
- 難民の暴動の話。支援に際して様々なアプローチを考えねばならないというのが興味深かった。
- イシューブリーディング等での質疑応答
- 難民への話で、支援のアプローチの仕方を考えなければいけないということが興味深かったです。
- イシューブリーディング：現場での実践を積み重ねているからこそその知見に触れる事が出来たから。また、インタラクティブに議論出来た事も、理解を深める事に繋がり良かった。
- 冒頭で、何故 NGO や NPO に入った理由やきっかけの話がとても良かった。

質問5) プログラムで改善すべきセッションがあれば教えてください。またそれは何故ですか？

- テーマ案：人は何のために生きているのか。若者にとって真面目にきちっと教えてもらったことがない。親が教えてくれない。
- 特になし

- 鈴木さんのはなしがはやい！
- タイムキーパーの時間管理
- 来年もこれを継続してほしい。ファシリテーターや講演者がかなり良かった。理由は、話が明瞭でプログラムとしてユースをリードしてくれたから。

質問6) 今後 OFY にて取り扱ってほしいテーマや講師があれば教えてください。

- ソーシャルビジネス
- 歴史、平和学
- イベントのつくりかた
- 貧困問題（2）
- セクシャルマイノリティ（2）
- 宇宙/深海/AI/等が関わる、まだあまり馴染みのない領域
- 環境問題をお願いします。

質問7) 来年以降のフォーラムの運営やワイズメンの活動に関わりたいという場合は、お名前とご連絡先をお知らせください。

- 未定
- 運営等に関わるのは難しいですが、何かお手伝いできることやイベント等あれば連絡頂けるとうれしいです！
- 「どんな活動に」「どう関わるのか」を、まず知りたいです。

質問8) その他何かコメントがあれば以下に記載してください。

- 1日の中身の濃いフォーラムでよかったです。
- 様々な方と交流するいい機会になりました。
- 良かった
- メインに関わり続けることは難しくても、関心を持ち続けることはできると思うので、これからも関心は持っていようと思いました。貴重なお話ありがとうございました。
- とても有意義な時間になりました 普段不満に感じていることはありますが、どうせ変えられないと思ってなにも行動できていなかったのですが、行動を起こそうと思いました。また、どうやって生きていくか人生のヒントを得られました。

ありがとうございました！

オープン・フォーラム Y 感想文 (ワイズ・実行委員編)

張替滋夫

「現場を大切に」という浅羽リーダーのシナリオ通り、ベテランファシリテーターと三講師の稀有なキャリアを迫体験しつつ参加者一同、混然一体の共同体感覚にひたった充実感あふれる平和な一日でした。再演が望まれます。

本間 剛

今回の第5回オープンフォーラムYは、大変有意義だったと思います。一日に凝縮したのも良かったし、集まったユースの面々が、優秀なうえ、生き生きとした発言を交わし、ファシリテートされた鈴木さんの飽きさせないテンポといい、3名の講師の方々のそれぞれの切り口での生々しい体験談&思いが皆に伝わり、全てが良かったと思います。ユースが終電も顧みず、残って宴会していたのが、何よりもの証拠だと思います。全員一致の意見と思いますが、あれだけの情報量&内容が有りながらのあつという間の一日でした。少数精鋭ではありましたが、内容的には、百人以上の人数で纏めたかったぐらいで、ユース、ワイズ、YMCAともに共有できる人数が少なかったのは大変勿体なかったと思います。いずれにしても浅羽主任の思いの詰まった一日でした。浅羽年度の“集大成”だったと思います。

小原史奈子

今回初めてOFYのお手伝いで参加させて頂きました。講師の方々が今の仕事に関わるようになった経緯や社会貢献、人道支援、児童養護施設運営についてなど、普段聞く事のなかった現場の声が聞けました。いろいろな角度から困難に立ち向かっている講師陣から「失敗を恐れなくて」というメッセージは印象的で、多くの事にチャレンジしているユースが抱える悩みに響いているのでは。と感ずることが出来ました。OFYを機会に話合える場が広がることを期待します。

太田勝人

「第5回オープン・フォーラムY」に参加して
さる 6/18 (土) 9:30 から代々木オリンピックセンターにて開催された“フォーラム”は、NGO法人「ジェン」の木山啓子氏、「難民を助ける会」の福井美穂氏、そして児童養護施設「さんあい」の高瀬一使途氏を講師にお招きし、鈴木洋一氏によるファシリテーターとして素晴らしいリードをしてもらい、参加者全員をそれこそ “Wake Up “し続けてくれる「わざ」にて 一日ずっと実に充実した価値あるイベントでした。
集まってくれた大学生、大学を卒業して間もないユースの皆さんにとって、3人の講師による“現実の体験に裏打ちされた、具体的な実践活動の一つ一つが大変有意義なものであったと確信をもって言えます。ユースの皆さんは、土に栄養分が浸み込んでいきますように、ご自分で養分を吸収し、自分なりに感じるものがあつたことと思います。今後の成長を期待しています。今回このフォーラムを企画してくれた浅羽さん、コーディネートされた渡邊さん、衣笠さんに大きな拍手を送らせて頂きます。有難うございました！

小口多津子

「2016年のOFY感想」

今年のOFYは、爽やかな緑深いオリンピックセンターでの一日という日程は、最後まで中身が詰まった充実した時間でした。 流れるような時間運び、疲れることなく一日が過ぎて、ファシリテーター鈴木洋一氏はさすがと思いました。若者にはびったりの言葉の速さ、流暢さに私は頭の中では追いかけるのが一生懸命でした。児童養護施設「さんあい」施設長の高瀬氏の言葉の重みを、今の社会性とマッチして私にはとても強く響きました。グループの意見交換、議題にもよるが、途中でメンバーをシャッフルしても良かったかなと感じました。

衣笠輝夫

過去4回の「オープンフォーラムY」は試行しながら「シリーズ土曜日毎7日」又は「1泊2日」で行われてきましたが、始めから終わりまで通して出席し全体を理解する参加者が少ないという課題がありました。今回は日帰り1日でした。1日間でしたがプログラムがよく考慮され、途中退席者もなく、密度の濃いフォーラムだったと思います。課題は解決されたと思います。今後はこの内容がフォローされ、より深められた内容にするための、1日日帰りフォーラム第2弾も検討課題かと思います。つまり2回/年の日帰りフォーラムの企画もあって良いのではと思われています。

立教YMCA 4年 高 彰希

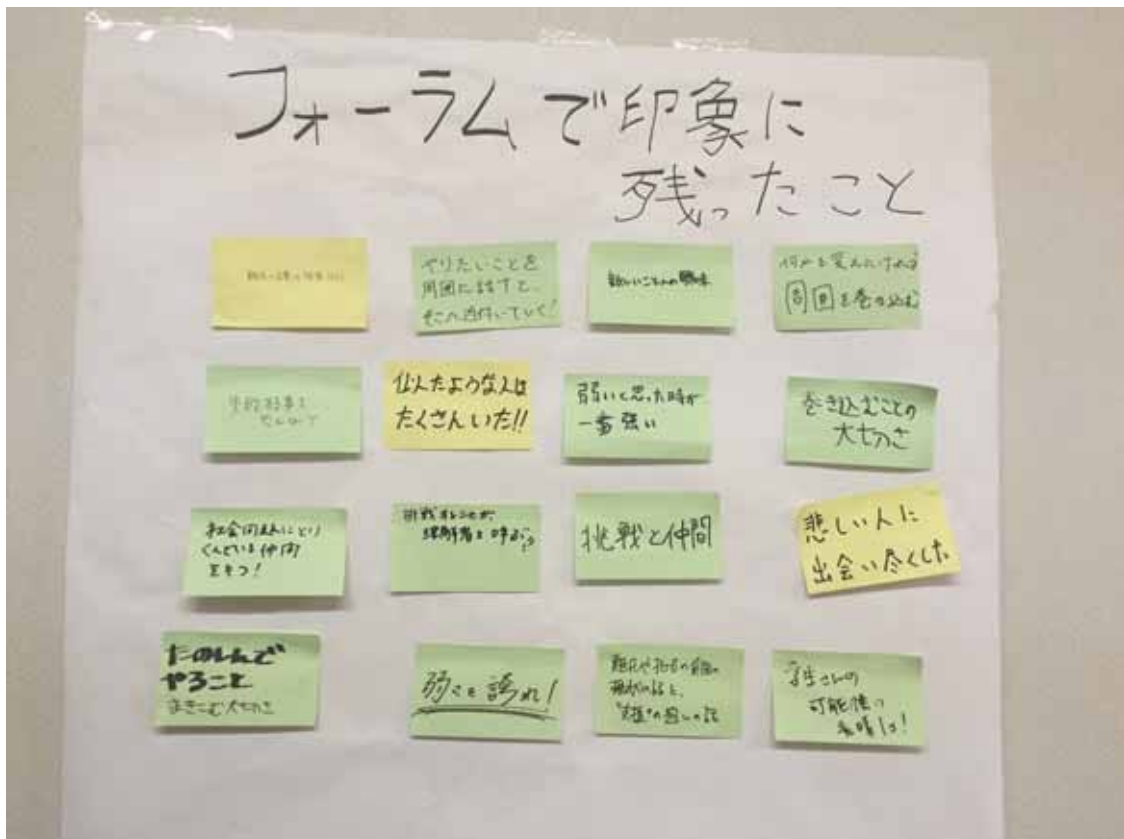
初めて参加したOFYはとても濃密な時間であった。3人の講師や司会を務めた鈴木さんはみな海外での現場経験があり、それぞれの人生の転換点で大きな決断をしているという印象を受けた。いまの日本の若者へ向けて、自分たちが行動することで社会が変わるという「小さな成功体験」をつくり、自信をつけていかなければならないとおっしゃっていた。私自身、新たな挑戦をなにかと躊躇うことがあるので、この教訓をしっかり受け止めなければならぬと思った。また、この度はユースの目線ということで運営側にも微力ながら携わることとなった。このような貴重な経験を糧に、これからも学ぶ姿勢をつねに持ち続けていきたい。

浅羽俊一郎

一日を一緒に過ごしたユース12名は共通の関心と皆違った個性の持ち主でした。それぞれの場で懸命に生活している彼らの話すのを聞くのは何故かとても爽やかでした。ワイズの皆さんもしっかり参加してくれたこと、良かったと思います。人道支援の現場って分かりにくい。それを講師陣とファシリテーターが、自分の悩みや喜びを交えて語ってくれたのは参加者には新鮮な体験ではなかったでしょうか。私は若者の社会正義感、発信力に触れたことが何よりの収穫でした。

会計報告

予算		決算	
収入		収入	
参加費 @1,000×30 人	30,000	@1,000×12 人	12,000
ユース活動資金から補助	81,500	ユース活動資金から補助	87,417
収入合計	111,500	収入合計	99,417
支出			
講師謝礼 @10,000×4	40,000	@11,000×4	44,000
交通費	8,000		4,222
会場・設備	20,600		20,600
昼食費 @650×30	19,500	@560×16 (ユースと講師)	8,960
懇親会用茶菓	10,000		4,050
チラシ印刷 (千枚)	8,000		6,912
事務費・雑費	6,000	コピー代、郵送料他	10,673
支出合計	111,500	支出合計	99,417



資料 ワークブック原稿

以下は参加ユースが3名の講師とファシリテーターの仕事、問題意識、ユースへの問いかけを知ってもらうことを目的にワークブックに寄稿された文章です。

特定非営利活動法人ジェン 代表理事 木山啓子氏

1) 活動内容

ジェンは、1994年に紛争中の旧ユーゴスラビアの支援をするために、6つの団体が結集した半年だけのプロジェクトとして始まりましたが、難民の方々の状況が余りに厳しく、半年で終えることなどできない、と、継続して、22年経過した緊急人道支援の団体です。緊急であっても、人々の心の復興に重点を置き、緊急事態からの自立支援を、アフガニスタン、パキスタン、イラク、ヨルダン、スリランカ、東北や熊本などでも実施しています。

2) 中長期的現場での課題・職員はどのような問題に直面するか(3つくらい)

- ・治安が悪いこと
- ・新たな緊急が立て続けに起こること(難民や被災者として長期間避難している人がいる上に、更に支援を必要とする人が増え続けている)
- ・人々の心の中のこだわり

3) OFYで参加者にはどのようなことを考え、悩んでもらいたいのか。

- ・自分は世界の中の一員である。ということは、世界で起きている問題の当事者である。ということは、世界で起きている問題を解決することができる人でもある、ということについて、考えて頂きたいです。

児童養護施設さんあい園長 高瀬一使徒氏

1) 活動内容

児童福祉法を根拠にした児童養護施設。保護者のいない児童、虐待された児童、その他環境上養護を要する児童を入所させて、養育し、退所した者に対する相談、その他自立のための援助を行っている。虐待や貧困等で「子どもの権利」が奪われている児童のセーフティーネットの役割を担っている。さんあいは、定員35名の小規模施設で、児童6人毎に生活単位を形成する小舎制の家庭的養護を実践している。キリスト教の三愛主義即ち「神を愛し、人を愛し、土を愛す」を理念に、思いやりのある子を育てることを目的としている。

2) 現場の課題

近年、児童養護施設に入所する児童は、虐待や不適切な養育により様々な障害を抱えており、職員は高い知識や専門性が求められる。一方、職場環境は改善しつつも、給与や福利厚生の方では遅れており、入職後3年以内の職員の離職率は50%と高く、長期的な育成が難しい。さらに年々児童養護施設に応募する保育士が減っており、職員の確保が最大の課題となっている。

3) ユースへの問い

最近アドラーの心理学に傾倒しています。彼の視点や言葉は、聖書が示す価値観と重なり、職業人・家庭人としての課題に明確な指針を与えてくれます。「生きる喜びや幸福感は他者との関係からしか得るこ

とができない。」と。皆さんは将来どんな人々との関わりを通して喜びを感じようとしていますか？どんな職業でも人との関係が大切です。チーム内の関係、上司との関係、顧客との関係等々。人間関係は避けられません。私も職業人として人間関係に悩み、挫折しつつ成長し今日に至っています。特に児童養護施設は職場が子どもたちの生活の場です。虐待に傷ついて、信頼関係が築けない彼らと24時間、365日チームとして向き合う大変タフな職場です。でも、それだけに喜びも多い。何故なら、子どもたちやスタッフとの関係が密だからです。皆さんの貢献したい相手はどんな人でしょうか？ 地域住民？ お年寄りや障がい者？ 困難と向き合っている災害や戦争の被災者でしょうか？ イエス・キリストは問いかけます。「貴方にとって愛すべき隣人は誰ですか？」貴方が関わりたいと思う人のために貢献できること。これが、職業を選択する上で、最も大切なことだと思います。

認定 NPO 法人 AAR Japan[難民を助ける会] 福井美穂氏

1) 活動内容

AAR は、政治・思想・宗教に偏らないことを理念に、緊急支援、障がい者支援、地雷対策、感染症対策、啓発を5本柱に17か国で活動しています。東日本大震災や熊本地震でも活動しています。具体的には、被災者や難民に対し防災や減災、レジリエンス（復元力の強化）重視の緊急支援。地雷被害者への車いす製造・配布、職業訓練、理学療法、インクルーシブ教育支援、リハビリテーション（CBR）を実施し、地雷・不発弾の減災教育や除去支援を行っています。HIV/エイズやマラリアなど感染症対策を行っています。国内ではイベントや講演会などの啓発活動を行っています。

2) 中長期的現場での課題は何か？

(1) 資金面では年間予算19億円（2014年度）の内、日本政府等38.2%、海外から7.8%、寄付・会費が12.1%。中立・公平の観点と国民の善意を現地に届けるために、民間募金に取り組んでいる。
(2) 人材面では、海外事業職員の確保と定着が課題だ。語学力と専門性に加え、現地の事業と生活上の困難に対応できる人材が求められる。他方、給与や福利厚生面でもまだまだ課題は多い。
(3) 事業面では多局面での課題がある。緊急支援では安全管理が大きな課題であり、アフガニスタンのように遠隔管理・担当職員のローテーションで対応しているが、事業の質の確保が課題。

3) OFY で参加者にはどのようなことを考えてもらいたいですか。

皆さんにとって、緊急人道支援や貧困対策は遠い問題ですか？身近に感じる瞬間ありますか？私は、中学時代に祖父母の第二次大戦時の経験を学び、そこから紛争の被災者への支援に関わりたいたいと考えようになりました。実際、支援の現場では、苦しい中でも一人の人間として自信と喜びに満ちた被災者の生き方から学ぶことがはるかに多かったです。同時に自分がいかに良い環境に恵まれていたかを痛感させられました。皆さんの夢には他者は存在していますか？

Wake Up Japan 共同代表 共同代表 鈴木洋一氏

A) ファシリテーターからの呼びかけ

私たちは、皆さんの社会問題に対する気持ちを大切にしています。問題の解決には知識は重要ですが、それ以上に必要なことは「どうにかしたい」という気持ちだと考えています。フォーラムでは、

さまざまな新しい情報に触れ、頭がパンクしそうになることもあるかもしれません。そうしたときには、一息ついて、まずは「心」がどう感じたかに耳を傾けてください。また、参加した同じような思いを持った参加者や講師、スタッフと対話をしてもらいたいと考えています。対話が行えるよう安心できる場づくり、相互の尊重について、ご協力をお願いします。

B) 団体紹介

1) 活動内容

国内の社会問題と海外における問題に対する取り組みをつなぎ、日本に生きる人々が協力し合って、こうした国内外の社会問題の解決に参加することを働きかけています。そのために、社会問題解決のためのリーダーシップ育成事業を通じて問題解決の担い手を育み、国内外の社会問題に対する問題意識を高めるための情報発信を同時に行うことで、国内外の場所に関係なく、社会的な不条理に対して問題意識をもち、行動する環境づくりを行っています。

2) 課題

若者が社会問題を解決するうえで、日本には3つの課題があると認識しています。(1)「社会問題の個人化」。日本社会では、社会の問題を人々が共に生きる場における全体の問題というよりも、個人が有する私的な問題であり、「自己責任」だと認識されがちです。社会の仕組みや構造的な原因に焦点を当て、そうした事実関係を認識している人々も多くなく、そもそも問題があることさえ認識していないことも多い。(2)「自己肯定感の低さ」。諸外国との調査結果でもよく言われることですが、日本社会では若者が自分の参加で社会に少しでも変化を与えられると認識していることは少なく、また、過去の社会を動かした成功体験の多くが世代間共有がされていないのが実情。(3)「コミュニティとしての多様性、人との接点の少なさ」。日本社会では、世代や同じ属性を超えて人々との出会い、共感を育む機会が少なく、他者に対する冷たい態度がとれやすい。

3) OFYで参加者にはどのようなことを考えてもらいたいですか？

私が皆さんに考えてもらいたいことは以下の3つの質問にまとめることができます。

1. 社会問題や社会的な不条理についてどう感じますか？仕方がないこと？あなたはどうしたい？
2. 「他人事」が「自分事」になるためにはどのようなきっかけが必要でしょうか？
3. 周囲の人々の問題意識を育むためには、あなたはどのように働きかけたら良いでしょうか？

以上

2016年8月23日発行
発行者：第5回オープン・フォーラムY実行委員会
委員長 浅羽俊一郎
発行所：ワイズメンズクラブ国際協会 東日本区
〒160-0003 東京都新宿区本塩町7
Tel/Fax： 03-5367-6652